14　自分タイム

総合的な学習「自分タイム」領域

1　「自分タイム」でねらうもの

「自分タイム」とは，子ども一人ひとりの興味・関心から出発し，学習課題（学習内容）を自ら決定し，見通しをもって課題に取り組む学習活動として構想したものである。

自分タイムの学習活動は，子どもたちが，学習とは楽しいものであり，自分たちの生活を豊かにしていくものであるということに気づくのにふさわしい学習活動であろう。そして，この活動は生涯学習につながる可能性を持っているのではあるまいか。本領域では，自分の課題を主体的に追究する学習活動によって，学習の仕方を習得し，自分自身を見つめ，自分や自分の生活を豊かにすることができると考えている。自分の力で自分のやりたいこと（学習課題）を見つけ，主体的に学習を追究し，よりよいものを求めて，楽しんでいる姿が，本校でめざしている「自立に向かうこどもたち」の姿である。

ここで言う「学習」とは，従来の教科，領域という狭い捉えでは考えていない。自分の興味や関心が持てることを追究することも「学習」と捉えている。

子どもたちの中には，日常生活の多種多様な体験のなかで，その子なりの興味・関心・疑問・こだわりをもっている子もいれば，時間的なゆとりを見い出しにくかったりするなどの理由により，興味の対象がはっきりしなかったり，興味のある課題に没頭して追究することが難しい子どもも見られる。

子どもたちは，失敗や成功を繰り返しながら，学習の仕方を習得し，自分を見つめ，新たな自己を創造することができるのではないだろうか。その意味で，自分タイムでは，一単元だけで育ちを見ていくというものではなく，低学年生活科から第6学年までの積み上げを大切にしていきたいと考えている。

2　自分タイムの学習活動の柱

(1)　課題の自己決定

自分タイムでは一人ひとりの子どもたちの日常生活や学校での学習の中から見つけ出された課題を，自分なりに考えた道筋に沿って学習計画を立案し，課題を追究すること自体を重視したい。初期の段階では，「こんな活動をしてみたいな。」という思いはあるが，学習課題が明確でなく，学習計画が曖昧な場合もあるであろう。教師（大人）の価値判断で枠組みすることなく，子どもの実態を十分考慮して，その子なりの思いや願いが実現できるように支援していくことが重要である。

また，課題の追究形式は，体験的活動，調査的活動，製作的活動など，個に応じて多様になり，学習場面も拡散していくであろう。図書室やコンピュータルームなどの室内や学校外で調べ活動をしている子もいれば，音楽室でアルト・サックスを吹いたりしている子もいるであろう。

教職員の個性を生かした指導・支援の場を確保するとともに，地域の人々，各専門機関などと密接に連携をとりあいながら様々なネットワークを作り支援体制を確立させていきたい。

(2)　探究・表現活動

表現することを通して，自分の思いや考えが整理され，明確になり，新たな課題が発見されることも多い。表現形式も，文章，絵（マンガも含む），身体表現（劇，パントマイム）など多様である。他者から好評価を得る発表のための表現ではなく，学習課題を明確にし，修正できるような表現を求めたい。発表のための表現は，その子自身の学習活動が棚上げされることにより，学習への意欲

を損なうことにもなりやすい。子ども達の願いが膨らみ，「卒業論文・作品を制作したい。」「学年を越えて成果を発表したい。」などの願いが出てくることに期待したい。

また，子ども達の主体的な学習成果の積み上げが，作品として蓄積され，学年を越えた学習集団相互に感化・影響を与えるであろうことを期待したい。こうした地道な取り組みの成果として，課題や追究の質が高まり，学習の対象が広がりながら，学校文化の創造につながるのではないだろうか。

(3) 自己評価（相互評価）

学習の成果をさらに高めるためには，自己評価が重要である場合が多い。子どもたち自らが，活動のめあてを明かにし，めあてに沿ってのふりかえりをしていくことにより，主体的な学習が展開できるようになると考える。自己評価や相互評価は学習のまとめだけに行うものではなく，追究の過程で随時行っていく必要がある。

3 学習過程の基本的な流れ

学習過程は，①課題づくり（オリエンテーション）　②学習への見通し（学習計画の立案）
③展開（追究・修正・まとめ）　④振り返り（発表・展示）の過程

を基本とする。発達段階や個人の実態に応じて，各学習過程の指導の重点が異なる。追究自体への教育的な価値を重視しながら，学習計画の立案の仕方，追究の仕方，課題設定の仕方，追究結果のまとめ方，発表・展示の仕方など随時指導・支援をし，その子にとっての成就感を大切にしたい。

4 支援の方針

(1) オリエンテーションの場における支援の在り方

子どもたちが自分タイムに魅力を感じることが大切である。日常生活場面や学習場面での興味・関心・疑問を日頃から出し合い，自ら追究したい課題を絞り込んでいく必要がある。ほどよい抵抗感があり，継続的に追究できる課題に絞りこむことができるように，前年度までの事例を参考例として提示することも有効であろう。子ども達の学校全体に向けての発表意欲が高まれば，展示物を見たり，発表を聞いたりすること自体が子どもたちの追究への糸口になると考える。

また，課題の追究が子ども達にとって負担にならないように，他の総合的な学習「人間」「環境」「コンピュータ活用」や，学校行事「宿泊学習」「海の学習」「山の学習」「旅の学習」などの概要を説明し，自分タイムの活動日程を示しておく必要がある。また，学習課題や学習計画を掲示し，相互に学び合う場を設けることも重要な支援活動であろう。

(2) 追究活動の場における支援の在り方

子ども達の追究活動には，指導者の有効な支援が不可欠である。例えば，「どこにいけば必要な資料が見つかるのか」「どのようにすれば道具（コンピュータなど）を使いこなすことができるのか」「どのようにして資料を読み取ればよいのか」「もっとよい追究の仕方はないか」「どのようにすれば自分の思いや調査結果を適切に相手に伝えることができるのか」など学習の仕方に関わる様々な課題に子どもたちは出会うであろう。自分タイムの追究活動は，一人ひとりの活動ではあるが，課題や追究方法が類似している場合は，集団で追究しながら，情報交換をしたり，相談し合ったりする方が学習効果は上がると考える。そしてそのために課題の共同追究や追究結果のまとめの分担は，発達段階を考慮しながら，検討を深める必要がある。

(3) ふりかえりの場における支援の在り方

・自己評価の観点が明らかにできるように配慮する。（言葉かけ，助言の吟味）
・自己の追究活動の発表の場の設定（子どもたちの活動の成果や満足度を知らせる場）
・みんなに広めて行きたいことを見逃さない教師の評価。